

重要ですが、正答を丸暗記するのではなく、参考書などで周辺の知識もしっかり学修しなければ得点できません。既出問題を理解して解くことが得点につながります。最低でも過去7年分の既

出問題を理解しながら学修しましょう。

実務実習での体験を国試の勉強につなげることは非常に大切です。改訂コア・カリにより、長期実務実習中に必ず

体験してほしいとされる「代表的な8疾患^{*1}」は、実践問題を中心にその疾患に関わる内容が多く出題されています。特に癌、感染症の出題が多い傾向が続いています。

※1 「代表的な8疾患」：癌、高血圧症、糖尿病、心疾患、

表3 第104～106回薬剤師国家試験の出題形式別平均得点率(得点)比較

出題形式	106回	105回	104回
必須(90問)	81.8% (73.6点)	80.0% (72.0点)	85.9% (77.3点)
理論(105問)	59.3% (62.2点)	60.5% (63.5点)	59.4% (62.4点)
実践(150問)	66.3% (98.8点)※	65.3% (97.9点)	70.5% (105.8点)
合計	68.2% (234.6点)※	67.6% (233.4点)	71.1% (245.3点)

※第106回は、問320(複合問題の実務)が採点除外のため、実践149問、合計344問

薬剤師国家試験の概略と

第107回に向けての対策

国試は、必須問題(90問)と一般問題(255問)の合計345題で出題されます。出題試験領域は「物理・化学・生物」「衛生」「薬理」「薬剤」「病態・薬物治療」「法規・制度・倫理」「実務」の7領域です。試験は、領域別に行うのではなく、薬学全領域を出題の対象として、「必須問題」と「一般問題」とに分け、さらに一般問題を「薬学理論問題」と「薬学実践問題」とした3区分で行われます(表2)。それぞれの試験区分について、第106回の傾向と第107回に向けての対策を記載します。

「必須問題」は、全領域で出題され、医療の担い手である薬剤師として特に必要不可欠な基本的資質を確認する問題であり、共用試験と同様の五肢択一の問題です。また「必須問題」は、一般問題に比べて比較的正答率が高い問題が多く得点源です。「必須問題」は、80～90%の得点率を目指して勉強してください。第106回ではかろうじて正答率60%を超えていました(表4参照)が、第105回、第104回の「物理」の正答率は、必須問題の中では他科目と比較して低い傾向が続いています。ただし、物理は「物理・化学・生物」として区分されるため、足りに該当する受験者はほばいないと予想されます。

一般問題の「薬学理論問題」は「実務」を除く全科目で出題され、6年間で学んだ薬学理論に基づいた内容の問題であり、難易度は必須問題より高く、

第106回も難易度の高い問題が多く出題されていました。また、第105回同様「化学」「生物」「衛生」との3連問(ビタミンKに関する問題)が出題され、科目の壁を越えた知識の習得が求められています。「薬理」と「病態・薬物治療」の連問は第104回、第105回の3題から4題へ増加しており、改訂コア・カリを意識した出題でした。この傾向は第107回以降でも変わらず、各科目で学修した知識を医療につなげるための総合的な職能として発揮できることが期待されていると思われる

科目別の第107回薬剤師国家試験対策

物理では、既出問題のキーワードを暗記するだけでなく、理解して解き、出題されている内容を応用できるようにする必要があります。臨床現場で直面する現象の物理的な要因の理解、臨床検査の分析技術の原理の理解など、実践問題につなげる学修も大切です。

化学では、化合物の構造およびその名称、立体化学などの基礎知識、化合物の物性および基本的反応などの基礎は早い段階でしっかりおさえた上で、生体成分への応用的な反応を学修し、実践問題に向けて備えましょう。

生物では、模式図や実験から情報を読み取る力が必要とされています。より多くの例題(既出問題や模試問題)で演習して力を付けましょう。

衛生では、ニュースや新聞などからも最新情報を入手し、医療にかかわる

事例については、知らなかった用語をリサーチするなど参考書だけではなく視野を広げて学修しましょう。

薬理では、出題頻度の高い薬物の作用機序や薬理作用をしっかりと学修し、特に実務実習で目にした臨床で重要な薬物を中心に、実践問題につなげられるようにしましょう。患者の症状、検査値、併用薬の情報を総合的に把握し、個々の患者に適切な薬物治療が提案できるようにしておきましょう。

薬剤では、既出問題の知識を暗記するだけでなく、理解・活用できることが求められています。処方変更が薬剤に関係する内容を思い出し、添付文書の情報を薬剤の知識につなげられるようにしましょう。

病態・薬物治療では、症例を解説できるようにするため検査値の把握は必

表4 第106回薬剤師国家試験の領域別正答率

領域系統	必須問題	理論問題	実践問題	総合	問題数
物理	60.8%	44.1%	55.3%	51.1%	20
化学	76.3%	41.4%	51.9%	52.7%	20
生物	87.8%	54.5%	65.7%	65.6%	20
物理・化学・生物	75.0%	46.6%	57.6%	56.5%	60
衛生	78.1%	62.9%	59.3%	65.8%	40
薬理	89.1%	73.0%	79.6%	80.7%	40
薬剤	77.6%	55.4%	53.2%	63.2%	40
病態・薬物治療	78.9%	60.5%	71.5%	70.1%	40
法規・制度・倫理	84.8%	73.3%	76.1%	78.1%	30
実務	92.2%	-	66.9%	69.6%	94
総合	81.8%	59.3%	66.6%	68.3%	344

※赤字：正答率60%未満

※第106回は、問320(複合問題の実務)が採点除外のため、実務94問、総合344問

脳血管障害、精神神経疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症(薬学実務実習に関するガイドライン 2015年2月 文部科学省)

国試は2日間で実施され、「必須問題」は1問1分、「一般問題」は1問2.5分で解くとされています。時間配分を考えて、難易度の高い問題を飛ばし、解きやすい問題から解くのもよいでしょう。その際は、マークシートの記入ミスには十分に注意してください。また、禁忌肢が導入されたことを意識し、読まずにマークしたり、マークミスをしたくないよう注意が必要です。

科目の壁を越えた知識の習得は重要です。近年、理論での連問(例えば、「薬理」と「病態・薬物治療」の連問など)が出題されていますし、一つの問題の選択肢に複数の科目の知識が必要な問題が多くなっています。国試の傾向をとらえながら、青本などの参考書を用い基礎を身につけ、沢山の問題に触れ応用力をつけましょう。

須です。情報・検定は、第106回では基本的な内容の出題が多かったため、既出問題の理解から学修をはじめましょう。新出題基準からの項目である漢方や遺伝子診断などもおさえておきましょう。

法規・制度・倫理では、今後も満遍なく、薬剤師として必要な事項が繰り返し出題されると予想されます。例えば、地域包括ケアシステムや健康サポート薬局のような、今後の日本を支えていく仕組みの定義・要件や薬剤師との関わりに注目して学修しましょう。

実務では、情報活用問題(イラスト問題、患者情報、医薬品情報など)や臨床で必要とされる計算問題、感染症、癌に関連する問題は今後も出題されると予想されます。国試の勉強でも、実務実習での経験を思い出しつつ学修していきましょう。

“患者”と“医療者”による本当のチーム医療とは!?



患者参加型 医療

本当のパートナーシップの
実現を目指して

岩堀 禎廣(合同会社オクトエル代表社員, 日本薬科大学客員教授)
鈴木 信行(聖医ねっと代表)
有田 悦子(北里大学薬学部 薬学教育研究センター医療心理学部門 准教授)

医療のこれからのあるべき姿である「患者参加型医療」。その考え方を広め、実現するために、患者と医療者双方の立場から“わかりやすさ”をコンセプトに概念や課題などを詳述した一冊。

A5判/104頁/定価1,800円+税

薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ(<https://yakuji-shop.jp/>)または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。